
クリスマスの贈り物

梨音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスへの贈り物

【Nコード】

N6372Z

【作者名】

梨音

【あらすじ】

一組の男女に訪れる、一夜限りの小さな奇跡。

「明日はクリスマス・イブねー」

蘭が窓の外を眺めながらそう呟く。
その横顔は寂しげで……。

「蘭姉ちゃん？」

「……逢いたいな」

誰に、何て言われなくても分かる。

昨日の電話でも遠回しに「帰ってくるの？」と聞かれたから。

「ゴメンね、コナン君に愚痴言っちゃって」

「さ、夕飯の準備しなきゃ」と言って立ち上がる蘭。

何でも無いように無理に笑おうとする蘭の横顔が見たくなくて、俺は「遊びに行ってくる」と言い残し毛利探偵事務所を飛び出した。

「はぁ……」

溜息が白い吐息となる。

（本当は……）

本当は自分だって蘭に逢いたい。

“江戸川コナン”という偽りの姿ではなく、本当の俺の姿でもそれは叶わない。

（情けないな、俺は……）

愛しい彼女の傍にしながら、何も出来ないのだから。
センチメンタルな気分でクリスマスモードの街中を歩いていると…
…。

「お困りのようですね、少年」

鈴のような声がどこからか聞こえてきた。
声のした方へ顔を向けると、文字通り全身真っ白な少女が佇んでいた。

異様な容貌とは裏腹に少女の存在感は希薄で、彼女の周りだけ世界と遮断されているかのように静かだった。

「貴女は……？」

少女の元へと駆け寄り、そう尋ねる。

普段の警戒心は不思議と働かなかった。

「私が誰かは言えない。でも一つ確かな事は、貴方の……正確には彼女の願いを叶えに来ただけ」

そう言っただ少女は何かを差し出す。

それは一粒の白い飴玉だった。

「これを食べなさい。そしたら一日だけ、貴方の一番大切な人の願いを叶えてあげる」

そう告げられ、半ば無理やりそれを受け取らされた。

「ちょ……っ」

「頑張つてね、少年」

「行った行った」と背中を押され、渋々少女から離れるように歩き始める。

しかしどうしても気になって「ねえ……」と振り返ってみると……。

「え？」

そこにいた筈の少女は、どこにもいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6372z/>

クリスマスの贈り物

2011年12月23日00時56分発行